

# みつくら

令和 4年 2月15日 第356号  
 発行 大瀬川活性化会議  
 編集 「みつくら」編集委員会  
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2  
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

## 消防団第1部後援会の事業を報告

言うまでもないがコロナ禍は様々な方面に影響を与えている。2年に1度事業報告をしている花巻市消防団第13分団第1部後援会は、令和2年度は会館の貸し出しが40回で8千円の収入があり、例年は129戸の会員から千円の会費を集金していたが、会費は徴収せず繰越金と会館使用料のみで運営した。支出は管理費など合わせて1万8千円弱で不足分は繰越金を充てたとの内容であった。コロナは残念ながら未だ収束が見えず、不自由な日々が続いている。令和3年度は各方面どのような締めくくりとなるのだろうか。

現在後援会の役員は、会長：板垣幸寿さん 副会長：菅原昭悦さん、熊谷武忠さん 理事：菅原昇さん、板垣匡俊さん、熊谷静治さん、辻村通義さん、畠山英男さん、熊谷利昭さん、熊谷修治さん、藤原芳男さん、高橋仁吉さん、高橋雅徳さん 監事：藤原邦雄さん、熊谷恭一さんが担っている。

## トップレディの工場等を返還

高級スーツや婦人服などを製造していたトップレディ岩手工場（石鳥谷町中寺林 本社東京都江戸川区）の閉鎖が令和3年11月に決まった事で、12月14日に工場や敷地などが貸し主の石鳥谷メリヤス有限公司（菅原純一代表取締役）に返還された。トップレディ（株）岩手工場は、石鳥谷メリヤス（有）跡地に石鳥谷町が第1号に誘致した工場で、昭和57年1月10日から操業していて創業40年で幕を閉じた。トップレディの創業当時は、大瀬川から営業課長として熊谷茂（田屋家）さんはじめ、多くの方が勤務した。石鳥谷メリヤス（有）は、工場を貸与してからは資産管理会社として存続していて、菅原長六代表取締役が亡くなった後は熊谷茂さんが代表を務め、令和元年からは菅原純一さんが代表取締役を担っている。

## IBCラジオで板垣さんを紹介

IBCラジオの人気番組「のりこの週刊おばさん白書」で1月2日に甘木竈家の板垣千晶さんが紹介された。この番組

は、毎週日曜日の午後に放送していて、アナウンサーは数年前に大瀬川新春講演会にお招きした後藤のりこさん。3時間30分の番組の中程（15:30）に「バースデー・ミュージック・プレゼント」のコーナーがあり、誕生日の人に曲をプレゼントするというもの。板垣さんはこの日が誕生日だった。「44歳のお誕生日おめでとうございます・・・」後藤のりこアナウンサーのコメントに続いてプレゼント曲が流された。

「のりこの週刊おばさん白書」は、数年前に日本民間放送連盟賞のラジオ生ワイド番組部門では、北海道・東北ブロック審査の1位を経て、全国審査で優秀賞に選ばれている。

## 9区公民館内の清掃を行う

9区の婦人会では、班ごとに年1回の9区自治公民館清掃を行っている。1月23日は2班が担当となり13名で清掃作業を行った。

## 「たろし滝へようこそ」の幟旗を立てる

大瀬川たろし滝保存会（板垣 寛会長）では、冬の風物詩となっている「たろし滝へようこそ」の幟旗約100本を1月16日に会員20名が大瀬川改善センターに集合し、組み立てた後それぞれの担当場所へ設置した。この幟旗は令和2年11月に大瀬川活性化会議地域づくり交付金の公募事業を活用してオレンジ色からピンク色にリニューアルして2年目となる。

## 軽スポーツで体力づくり

第一老人クラブ（熊谷善志会長）では、冬期間に「軽スポーツで体力づくり」の事業を実施している。特に今年度は花巻市老連石鳥谷支部が新しく採用した「グッブ」と「ポッチャ」の大会が開催されるため、これに向けて、1月8日に支部指導員3名を迎えて体験会を行った。この日は7・8区からも4名が加わり14名が参加したが、全員初心者のため、ルールから競技説明を真剣に学び、1月17日の支部大会に向けて練習し、さらに13日にも12名が参加して猛練習をした。

## 8区で2年振りのみずき団子

2月1日号の「みつくら」でもお伝えしたが、8区自治公民館（菅原洋二館長）では1月10日、幼児からお年寄りまで29人が参加して大瀬川振興センターのみずき団子を作った。昨年はコロナ禍の影響で作らなかったのが、2年ぶりの行事に子供達の喜ぶ姿が印象的であった。「みずき」や「台座」などの材料は前日に準備し、当日はお年寄りから教わりながら団子づくりや、飾りつけを行なった。昔と違い稲藁が無いので今年も板垣幸寿さんから藁をいただき錢棒を作ったが、やってみるとなかなかむずかしい。まず、縄の細かい方から教えられ、それに小判型のお餅を付けるのも、なかなか上手いはずが大騒ぎであった。団子の赤は春の桜、緑は夏の草木、黄は秋の紅葉、白は冬の雪色をあらわしているという。例年は飾りつけを終えた後に、作った団子でお汁粉をいただくのだが、コロナ禍のため

みずきに刺したお団子とお弁当をお土産に帰途についた。

## 八千穂稲荷神社西側側溝工事始まる

長年、大瀬川活性化会議で花巻市へ要望していた市道高速道路側道1号線「八千穂稲荷神社西側」道路改良工事が始まった。ここは、数年前に高速道路路肩の木々が伐採され落ち葉等は少なくなったが道路幅が狭いうえに側溝に蓋がなく脱輪の危険と側溝の老朽化によって排水詰まりもあった。側道は現在通行止めになっており、工事は約950万円の予算で3月末の完了予定となっている。

## 測定会へ向けて道づくり

コロナ感染第6波による岩手緊急事態宣言が1月23日に発令され、たろし滝測定会は昨年に引き続き、今年も規模縮小で実施することとなった。1月20日には「仮橋」が設営され、既に見学者と見られる足跡もあったが、測定会当日登りやすくするため、2月6日に「大瀬川たろし滝保存会」の有志23名で道づくりやロープの点検、しめ縄の交換等を行った。「たろし滝」は幸い一本に繋がって、測定会までは崩落しないと思われた。また、仮橋は2月末まで通行出来るが、今年も雪が多く滑るため、できるかぎり2名以上で訪れてほしいと関係者が話していた。

## 表彰（敬称略）

花巻市消防団表彰  
 優良竿頭級 第13分団第1部  
 花巻市長表彰の部（13分団）  
 精錬章 熊谷信人（1部）  
 勤続章 熊谷雄二（1部）菅原 渉（2部）  
 岩手県消防協会連絡協議会花巻地区支部長表彰の部（13分団）  
 功劳章 板垣章郎（本部）藤原美輝（1部）  
 精錬章 熊谷雄二（1部）菅原 渉（2部）  
 勤続章 畠山智明（2部）菅原喜孝（2部）

## 例年より早いイノシシ目撃

昨年もイノシシ被害が多かったが、今まで冬期間にイノシシの目撃情報はあまり聞かなかった。しかし、この厳冬期に菅原康之さん宅の西側の脇の雪が解けた土手を掘ったり、近くの雪の田んぼの中を走り回った足跡の目撃情報を聞いた。今まで、イノシシがこの地域で越冬していたのか定かではないが、やはり数が増えているためか雪解けを待たずにイノシシ被害が多発するのではないかと懸念される。折しも、2月19日に大瀬川活性化会議では「鳥獣被害対策講演会」を開催する予定だったが、1月24日からコロナによる市関連施設利用制限がレベル4となり、大瀬川振興センター・改善センターが当面休館となり、「新春の集い」と同じく「鳥獣被害対策講演会」も中止となってしまった。

# みつくら

令和 4年 2月15日 第356号  
 発行 大瀬川活性化会議  
 編集 「みつくら」編集委員会  
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2  
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

## 大瀬川橋の配水管を修理

水道管の破裂で、高く吹き上げた水柱の写真は、2月1日号の「みつくら」に掲載されたので、皆さんも読まれたでしょう。この配水管の修理が2月3日に終わった。

あの破裂は、1月25日の午前10時30分頃に、細川敏郎さんが大瀬川振興センターに駆けつけ、「見てみる!すごい水ばしらがじゃ〜!」と教えてくれ、センターからも高く水柱が吹き上げるのが確認出来た。

幸い、循環配管であったために止水しても各家庭には影響がなかった。大瀬川橋の循環配管は両側に2本あるほかに紫波町までの本管は橋から2m下流に別途水管橋がある。修理中の現場を見学したら、濁水がなかなか清水にならずに苦労していた。

高橋義晃さんによると、この配管は町水道が昭和54年(大瀬川、富沢への供用は昭和56年4月)に架設してから43年が経過していて、空気弁が破裂したものだ。

## 軽スポーツ大会で大瀬川チーム健闘する

1月17日花巻市老連石鳥谷支部の第1回軽スポーツ「カップ・ボッチャ」大会が石鳥谷体育館で開催され、大瀬川から「ボッチャ」の部に7区と9区からは2チームの計3チームが参加した。

予選リーグ戦では13チームが4ブロックに分かれて対戦し、7区と9区の1チームが一位通過で決勝トーナメント戦に進んだ。準決勝では大瀬川同士の対戦となり、7区チームが9区チームを破って決勝に進んだ。7区チームは強豪の八幡チームに惨敗したものの、僅か2回の練習で大健闘の準優勝となった。両競技とも子供からお年寄りまで簡単に楽しくできるので今後の普及が期待される。

## 「タイルアート教室」を開催

1月23日9区婦人会(熊谷ひとみ区長)では、「タイル工房KUJI」から2名の講師を招き「鍋敷き」を制作した。この日は、11名が参加して色とりどりのタイルを貼り合

わせ、それぞれの個性が活かされた、まさにオリジナル作品が出来上がり大満足。楽しいひとときを過ごした。

## 農福連携と公民連携を研修

1月16日に第8区農家組合(板垣公組合長)では大瀬川振興センターで35名が参加し研修会を行った。コロナ禍の為に昨年度と同様座学の研修会となった。組合長の挨拶に続き、藤原正彦(花巻農協理事)さんと佐藤道輝(花巻農協石鳥谷支長)さんより農協の活動や作柄の報告があった。

その後講演会に移り、第1部は「農福連携について」と題して、花巻市幸田にある社会福祉法人「悠和会」理事長の宮澤健さんの講演を聞いた。宮澤さんは平成13年に幸田地区の高台に社会福祉法人「銀河の里」を設立し、地域密着型の高齢者福祉サービスや障害者福祉サービスを運営しながら、「農の持つ可能性と魅力」を追求し、農産物の生産・加工・販売も行っている。

宮澤さんは「今の「農」は費用対効果が優先されているが、それだけでは語れない自然的、霊的なものが「農」には多くある。「農」を通じて認知症や障害者の方々や作業を行っている、一見おかしな人だと思っても実は真逆で、見えない世界が見える存在であり、これこそまさに農福連携では」と話されていた。

第2部は大瀬川の人も多く利用しているオガールについて「紫波町オガールプラザの歩みと、公民連携の展望について」と題した講演を聞いた。講師の八重嶋雄光さんは元紫波町の職員で最初からこのプロジェクトに関わっている。

このエリアは平成10年までの470戸の住宅の整備とJR紫波中央駅の開業に伴い、町有地の10.7ヘクタールの活用を模索して平成19年から調査を開始し、21年には紫波町公民連携基本計画を策定して事業がスタートした。八重嶋さんからは「オガールプラザの本当の凄さは、この事業に町から歳出が殆ど無いことで各自が自前で運営しており、将来的には町へ逆に歳入をすることで雇用も増え、交流人口も増えることを目指し、コロナ前には年間100万人もの研修や視察があった」と話され、また「産直「紫波マルシェ」は県内では第2位の売上を上げている」とも語っていた。

熱心に耳を傾けていた参加者は講演の最後に、どの様にしたらこの様なリーダーが育つのか知りたいと問うと「一人が良いアイデアを出したら皆が協力する事かな〜」と回答があった。

## 急遽「たろし滝保存会」の総会が書面議決に

たろし滝保存会(板垣寛会長)では、毎年たろし滝測定会の前に総会を行っているが、コロナ禍で昨年は書面議決となった。今年は感染状況が落ち着いていたため総会日程を1月29日に予定し会員に案内を出していたが、コロナ感染第6波(オミクロン株)の蔓延で岩手緊急事態宣言が発令され、花巻市でも各振興センターが休館となり、急遽郵送による書面議決となった。「議案は2月6日時点で過半数の承認を頂いた」と道づ

くり時に事務局から報告がされた。

## 人 事 (敬称略)

たろし滝保存会 さちお  
 会長 熊谷 幸夫(新)  
 副会長 菅原黎治(再) 菅原洋二(新)  
 顧問 板垣 寛(新)

## 屋根からの雪庇が放映

2月2日のNHKおぼんですいわての「はっぴーニュース」に板垣寛さんの投稿した自宅屋根からの大きな雪庇の写真が放映された。写真の紹介では、「屋根から雪が3mくらいが垂れ下がり、落ちないで18日も経っている」とアナウンサーが伝えていた。

## 各区の子供会を統合

石鳥谷小学校と大瀬川子供育成会(菅原康文会長、20世帯、児童22名)では、児童数の減少に伴い(特にも9区では、6年生が卒業すると2年生から下の4名になる)、小学校や子供会と会合を重ね検討した結果、令和4年度から7区8区、9区それぞれの子供会を統合し「大瀬川育成会」として活動することとなった。ただし、今まで通り各区の行事には参加し、代表者を設けて各自治公民館とも連携する。

大瀬川子供育成会の前身は、大瀬川子供会育成協議会で昭和46年に大瀬川小学校の子供会(各区に有り)を育成するために発足したが、昭和55年3月に閉校となったために解散している。昭和55年7月に石鳥谷小学校PTA副会長の高橋清志さんが発起人となり石鳥谷小学校の大瀬川地区児童を対象に大瀬川子供育成会を設立した。子供会育成会から「会」の文字を削除し、大瀬川子供育成会と決めたのは、石鳥谷小学校児童のみでなく、入学前の幼児も含めたいと板垣博司さんの提案を受け入れたもの。

子供会の形は変わっても、子供達の健やかな成長をこれからも見守っていききたい。

## 事務局

IBCラジオの「気象と防災マメ知識」の中で、神山浩樹アナウンサーが氷柱(つらら)の話をしていた。「つらら」の元々の語源は、関東から西の方で「あめんぼう」と言った。棒状になった水飴菓子に似ていることからと言われており、明治から昭和時代に東京でも使われ、標準語として全国的に広がった。岩手県内でも「垂氷(たるひ)」が詠り、「たらひ」「たるし」「たるす」「たるしゅう」「たろす」「たるぎ」など色々な呼び名があると話していた。

雪にも「津軽恋女」で歌われているように7つの呼び名があるし、凍った道路の表現も細やかな方言があって、寒い冬の時期を楽しんでいるようにもみえるが、いずれは使われなくなるのかもしれない。